

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
ふれあい チャレンジ きらりがやく 三里の子の育成	(1) 確かな学力の定着と指導力の向上 (2) 人間性豊かな心の育成 (3) たくましい体の育成

達成度 A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価

① 確かな学力の定着と指導力の向上							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	基本的な学習習慣・態度の定着	・学年相応の基本的な学習習慣を身につけることで学力の向上に必要な基礎を築く。	・児童が学習習慣として意識できるよう、県教委作成の「家庭学習の手引き」とあわせて、「家庭学習十ヶ条」「自習学習の例」を各家庭に配布し、活用のおねがいを懇談会等での保護者啓発を図る。	B	・「家庭学習の十ヶ条」については、学年末に児童アンケートを行い、自己評価や意識づけを行うことができた。 ・「自習学習」については、「自習学習コーナー」を設け、友達の様子を参考にすることができた。内容に広がりが出た。 ・「家庭学習がきちんとできている」という項目で、保護者の意識が40%に対して、児童は68%とずれがある。児童の意識を高める必要がある。 ・自習学習の取り組み方に関して個人差が大きい。	・振り返りを活用して、児童の意識が高くなるよう努める。 ・懇談会や家庭訪問等を利用して、保護者への啓発を図る。 ・家庭学習の進め方を工夫し、学力の定着を図る。
		確かな授業力の向上、専門性を高める研修	・確かな学力を身に付けさせるために「分かる授業」づくりを行う。	・校内研究における毎時間の授業づくり、研究授業、スキルタイムなどを行い、学習過程や取組の共通化を確認し、実践する。 ・授業後の研究会から出てきた成果や課題をもとに、次の授業の指導案作成や事前指導に生かす。各グループで検討し、「分かる授業」づくりを行う。 ・理解の定着を図る時間を学習時間内に確保し、形成的評価やまとめの時間を充実させる。	A	・学級担任全員が、研究授業を行い、授業づくりについて職員全員で協議を行い、取り組みの共通理解を図ることができた。今年度は報告文や詩、挨拶文など様々な授業を研究することができた。 ・「書くこと」の系統表を作り、学年ごとに目指す児童像を設定した。系統表を活用することで、前学年で習得すべき事や次学年へどのようにつなげれば良いかなど指導内容が明確になった。 ・「書くこと」について、形成的評価の行い方や評価が各学年で違いがあった。	・授業研究会や事前模擬授業をすることで、教師が自分ごととして意見を出し合えた。精選された「分かる授業づくり」につながり、授業力向上につながる。来年度も続けていきたい。 ・まとめの時間の充実や評価の方法を見直し、共通理解を深めていきたい。
		読書活動の推進	・読書習慣の定着と読書好きな児童を目指す。 ・貸出時に個人貸出冊数の意識付けを行う。 ・様々なジャンルの本を紹介する場を設け、図書館に行く機会を増やしたり、読書を促したりする。 ・「1とよかん」で学年別貸出冊数を公表する。 ・国語科や学級活動など学習に関する本を1つのコーナーにまとめ児童の関心を高める。	・3月末までに全児童の100冊読破を目指す。 ・貸出時に個人貸出冊数の意識付けを行う。 ・様々なジャンルの本を紹介する場を設け、図書館に行く機会を増やしたり、読書を促したりする。 ・「1とよかん」で学年別貸出冊数を公表する。 ・国語科や学級活動など学習に関する本を1つのコーナーにまとめ児童の関心を高める。	B	・貸し出しするときに、個人貸出冊数を告げるようにしたことにより、1月末までに52名の児童が100冊読破することができた。 ・多読表彰おすすめの本を紹介すること、図書館にコーナーを設けること、月ごとに個人読書傾向表を作成し、学級担任に知らせること、月ごとの読書のめあてのお知らせ、「〇年生の本だな」を図書館に設置したことなどにより、9類の本など様々なジャンルの本を借りるようになってきた。今年度は、9類・文学の貸し出し数が60%程度増加した。	・学級活動や国語の時間で読書についてのオリエンテーションの回数を増やし、様々なジャンルの本があることやコーナーを知らせて興味をもたせる。 ・司書と図書館担当教師、学級担任が連携して計画的に読書活動を進めていく。 ・全校児童100冊読破をめざすことは今後も引き続き呼びかけていく。
○教育の質の向上に向けたICT活用教育の推進	ICTを積極的に活用した授業の実施	・電子黒板やタブレットPCなどICTの有効性を検討し、児童の関心意欲と思考力を高める。	・各教科において、電子黒板やタブレットPCの有効な活用方法を研究し、授業で用いる。 ・ICTを利用した学習の推進や機器の操作などに関する職員研修を行う。	B	・校内研究や普段の授業において、ICTを活用した授業実践を全学年で実施できた。 ・機器の技術的課題を改善することや、タブレットPCの使用頻度を高める必要がある。	・継続して、ICT支援員の定期的来校を図り、授業での機器サポートを依頼する。 ・職員研修として長期休業を中心に、機器操作や授業での具体的な実践に関する研修やデジタル教材の作成、整理を行う。	

② 人間性豊かな心の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	礼儀・あいさつ	・明るい挨拶、元気の返事、正しい言葉づかいができる児童を育成する。	・基本的な生活習慣を身につけて健康的な生活を送ることの大切さを保護者や児童に発信するため、「ほけんだより」や掲示板を活用する。 ・保健室来室時や教育相談時など、教育活動全体で場面に応じた保健指導を行う。	A	・「あいさつや返事ができている」という項目「だいたいあてはまる」を合わせた、保護者が89%、児童は94%である。今後も、ふり返り表などを活用しいつでもどこでも、だれにでもいえるよう取り組んでいきたい。 ・6月の人権教室で、「安心・自信・自由」について提案し、12月は各クラスの発表を行い、全校で取り組みについて知るいい機会になった。	・家庭教育指針ふりかえり表の「あいさつ」の項目は、家族・地域の「おさま」先生に挨拶をすることができたかを振り返ってもらった。結果、「挨拶ができていない」「当てはまらない」と答えた保護者が11%、児童は6%であった。このことから、学校当ではまらない中だけでなく、さらに地域や家庭であいさつにさらに呼びかけていきたい。
		いじめ問題への対応	・子どもの心の状態を常に把握し、いじめの早期発見、早期解決に努める。	・毎日の朝ランニングへの参加を奨励する。 ・運営委員会主導のもと、長縄集会やスポーツチャレンジ週間を計画し、全員が運動に親しみ機会を増やす。 ・給食を残さず食べる態度を育てるため、栄養教諭を招いて食について学ぶ機会を設定する。(学級指導、なかよしタイム等)	A	・教育センターの講師を招聘し、Q-Uテストを基に職員研修会を開催したことにより、分析の仕方や学級経営への生かし方などを助言してもらい、児童理解が進み、よりよい学級作りができた。 ・毎月、心のアンケートを実施し、個別に対応することができた。必要に応じてスクールカウンセラーにつなげることができた。 ・「三里小さいめ0宣言」の掲示により、児童への意識付けができた。	・今後も継続して職員研修会を継続する。年間での児童の姿を確認するための職員研修会を行って、より一層の学級作りを活かせるようにしたい。

③ たくましい体の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	児童の健康的な生活習慣の確立	・基本的な生活習慣を身につけさせる。	・基本的な生活習慣を身につけて健康的な生活を送ることの大切さを保護者や児童に発信するため、「ほけんだより」や掲示板を活用する。 ・保健室来室時や教育相談時など、教育活動全体で場面に応じた保健指導を行う。	B	・保健だよりや掲示板を活用し、月にあった内容で保護者や児童に発信できた。 ・なかよしタイムで、熱中症予防やマスクの着用などについて児童に分かりやすく説明を行った。本校においては、熱中症の発生やインフルエンザの大流行を防ぐことができた。	・月目標に挙げて、全教職員で共通理解し全校的に取り組む。 ・保健だよりや掲示板による発信を工夫し、健康的な生活習慣の定着を家庭の協力をさらにえるよう努める。
		たくましい体づくりの推進	・継続的な体づくりを推進し、やり続ける児童を90%以上にさせる。 ・体育的活動の充実により、運動や外遊びが好きな児童を育成する。 ・給食を残さず食べる。	・毎日の朝ランニングへの参加を奨励する。 ・運営委員会主導のもと、長縄集会やスポーツチャレンジ週間を計画し、全員が運動に親しみ機会を増やす。 ・給食を残さず食べる態度を育てるため、栄養教諭を招いて食について学ぶ機会を設定する。(学級指導、なかよしタイム等)	A	・ほとんどの児童が朝ランニングに参加し、走ることができていた。 ・縦割り班やスポーツチャレンジなど、休み時間に体を動かして遊ぶ児童が多くなった。 ・栄養教諭に「栄養バランスの大切さ」について講話をいただき、栄養バランスを考えながら食事することの大切さを知らせることができた。	・朝ランニングの良さを再確認する必要がある。 ・食事のマナーの大切さもあわせて指導していく必要がある。
		○体験活動の推進	体験活動を通した実践力の育成	・総合的な時間や三里ふれあい自然塾等での体験活動の実践と見直しを行い、活動の充実を図る。	・自然体験、農業体験、ボランティア体験の目的を児童に理解させる。主体的・計画的に取り組む。 ・振り返りカードを作成し、次年度の縦割り班活動、三里ふれあい自然塾などの活動に活用する。 ・地域の方や、ボランティアスタッフの方に対して感謝の気持ちを持って、あいさつや礼儀を示すことができるように指導を徹底する。	A	・少人数集団の利点として活動には児童個人に充実と達成感を味わわせることができた。 ・実習園での農業体験は、三里ふれあい自然塾及び三里地区青少年育成会、他に地域人材の協力を得ることで低学年においても十分な体験活動を実施することができた。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策	
学校運営	○学校経営方針	学校教育目標及び経営方針、重点的な取り組みの周知	・学校目標や重点取り組みを周知徹底し、その達成率90%以上をめざす。	・学校教育目標の意味や目指すところについて、学校説明会等で具体的に説明する。 ・学校便りや、教育目標にかかわる取り組みや成果、児童の成長について知らせる。	A	・学校教育目標は入学式、育友会総会等の機会に説明し、それに向かう児童の姿を授業参観や毎月2回発行や学校便りで保護者や地域に紹介することができた。 ・授業参観や学校便りで具体的な活動を紹介したことで、児童の素直でほほえましい姿は保護者に伝わっている。しかし、教師の目からは児童の日常の姿に「学習意欲・自主性・挑戦心の向上」が見られないことが数字に表れている。	・10数年前に本校教育目標の達成に向けて設定して、例年通りで継続している地域連携活動を、2020年度完全実施の学習指導要領内容に準じて、「それを通して、児童がどう姿勢することを目指すのか」という視点で見直し、児童・学校・保護者(地域)レベルで目標と結びつた学習計画」という視点で見直し、地域にも意義ある教育活動にしたい。	
		●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化の促進	・各分掌間の連携及び情報共有を図り、効率的な業務への取組を推進するとともに、教職員の時間外勤務について1か月当たり前年度比5%削減する。 ・定時退勤日を金曜日に定め、厳守する。	・校内のサーバーを活用し、職員が校務データを共有することで仕事の効率化をはかる。 ・市内の校務支援システムを使って、回覧板機能やアンケート機能などを活用する。また、その具体的な方法を研修を通じて、職員のスキルをアップさせる。 ・教職員の業務記録を確実に把握するとともに、業務の偏りがないように配慮する。	B	・各分掌間の連携を図ることで、業務の効率化を図った。また、校務サーバーを使ったデータの共有化や校務支援システムの活用によって、業務時間の短縮を目指した取り組みを行った。 ・毎月の業務記録集計を見ると、本校においては80時間を超えるような職員はいない。しかし、新学期の学級の立ち上げや学期末にはどうしても業務が超過することがある。	・校務のさらなる効率化を図るとともに、行事の見直しを継続的に行っていく。その際、新しい校務や行事を設ける際には、必ず省ける事柄を検討していく。 ・地域行事や「三里青少年育成会」などの協力関係を再見直し、全職員で取り組むことと担当で取り組むことなど整理し、職員の負担の軽減を図っていく。
		○開かれた学校づくり	保護者や地域に信頼される学校づくり	・地域行事へ積極的に参加し、地域と学校の繋がりを太くする。 ・学校の情報をいろいろな方法で積極的に発信する。	・青少年育成会や三里ふれあい自然塾、三里まちづくり協議会と連携し、児童にかかわる行事に積極的に参加する。 ・学校便りを月2回以上発行する。児童の活動の様子は随時HPに掲載したり、校内や支館の掲示板で地域に知らせたりする。 ・教育成果を授業参観、運動会や三里フェスタ等の行事で公開する。	A	・地域組織団体連携活動については、児童の健康安全面を考えた改善策を入れながら、要請に応じた活動を計画的に進めることができた。 ・学校便りは定期的に発行し、HPにも同内容を随時掲載して、地域関連行事を通して児童の活動を保護者・地域住民に伝えることができた。 ・授業参観日や三里フェスタで「日頃の学びの実態や成果の見える内容」を公開して、保護者や地域に理解と協力を求めることができた。	・本校では10数年前から継続している地域(育友会)と学校との連携活動を、ほぼそのままのやり方で継続している。それは「本校の素直な児童の育成につながるよきであるが、現在の学校教育に求められていることとのズレや教職員の勤務状況に対する悪影響が生じ始めている。そこで、地域の育成会や保護者と相談しながら、「地域の子どもを地域で育てる地域の体制づくり」も踏まえた「現状にあった新たな地域連携教育活動」を模索していきたい。
	保護者・地域との連携	地域の生活文化の拠点となる学校づくり	・「学校は保護者や地域と連携・協力して教育活動に取り組んでいる」という保護者を90%以上にさせる。	・学校を地域の生活文化の拠点とするため、学校行事や育友会行事等について、機会をとりながら積極的に参加する。 ・行事毎のアンケートや様々な機会を利用して、保護者や地域の声を聞き改善を図りながら、小規模校ならではの、地域に根差した「特色ある学校づくり」に取り組んでいく。	A	・「学校は保護者や地域と連携・協力して教育活動に取り組んでいる」と思ふ保護者、教師共に約95%で、高い評価であった。 ・学校便りや全戸配布チラシ等で情報を発信することで、学校行事や授業参観に多くの参加者があった。三里フェスタでは、最長子女の3倍以上参加者があった。アンケートにも、児童の頑張りを称賞する内容が多く書かれていた。	・今後もアンケートや地域の会合等様々な機会を利用して、保護者や地域の声を聞き改善を図りながら、小規模校ならではの、地域に根差した「特色ある学校づくり」に取り組んでいく。 ・地域の「三里青少年育成会」や「三里ふれあい自然塾」、「三里まちづくり協議会」および育友会・学校の連携・協力関係において役割分担を見直し、より児童の自主性や体験を豊かなものにするよう組織を見直ししていく必要を感じる。	

4 本年度のまとめ・次年度の取組

・アンケートからは、96%の保護者が「教育活動の成果が出ている」と回答するなど、本校教育活動に対しておむね成果を認める評価を得ることができた。また、児童の93%が学校教育目標のように頑張っていることがありと回答している。日々の教育活動を積み重ねてきた成果だと考える。
・本校の特色の一つであり、学校運営の大きな柱である「保護者や地域に信頼される学校づくり」「保護者や地域と連携・協力した教育活動」については、今年度も保護者等より高い評価を得ることができた。今後も、地域の生活文化の拠点であることを自覚して教育活動に取り組んでいきたい。
・「読書活動の推進」「ICTを積極的に活用した授業の実施」については、一定の成果は上がっている。しかし、A評価となるには、今後も手立てを工夫しながら継続していく必要がある。また、「業務改善・教職員の働き方改革の推進」については、職場環境の改善を目指し、校内でどのような工夫が可能なのかを検討する組織的な取り組みとともに、一人一人の意識改革や作業の効率化を目指していきたい。また、中間評価として、各行事ごとに保護者や来校者のアンケートを実施した。来校者の方からも、児童の頑張りを職員が評価していることに対して好意的な意見をいただいた。

●は共通評価項目、○は独自評価項目